

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2014～2017

課題番号：26704002

研究課題名(和文) 19世紀前半のイギリスにおける功利主義思想の展開 理論と実践の相克

研究課題名(英文) Theory and Practice of Classical Utilitarianism in early nineteenth century Britain

研究代表者

川名 雄一郎 (Kawana, Yuichiro)

早稲田大学・高等研究所・准教授(任期付)

研究者番号：20595920

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：ベンサムとジェイムズ・ミルのもとに集った19世紀前半のイギリスの功利主義思想家たち(哲学的急進派) 具体的に検討対象としたのは、ベンサム、ジェイムズ・ミルの他、デイヴィッド・リカード、ジョン・オースティン、ジョージ・グロート、ウィリアム・モールズワース、J・S・ミル、などの知的営為を分析し、その特質と多様性を明らかにした。
その際には、「理論と実践の相克」という観点から、そして、彼らの理論や実践をベンサムではなくジェイムズ・ミルを中心とする人的ネットワークという枠組みの中で、検討した。

研究成果の概要(英文)：This study aims to show how highly diverse the classical utilitarianism was both in form and content, by examining the theories and practices of the so-called Philosophic Radicals, i.e. early nineteenth century utilitarians led by Jeremy Bentham and James Mill. Those I take up as the subject-matter for this study include David Ricardo, John Austin, George Grote, William Molesworth, and John Stuart Mill among others. In this study, I pay a particular attention to the importance not only of Jeremy Bentham's theoretical influence, but also of James Mill's theoretical, practical, and personal influence among the philosophic radicals.

研究分野：人文学

キーワード：古典的功利主義 哲学的急進派

1. 研究開始当初の背景

近年の功利主義思想史研究は、資料の整備の進展にともなって個々の思想家のテキストに即した内在的研究が進みつつあるものの、当時の歴史的な文脈（コンテキスト）の中でそれらの議論がもっていた意味を明らかにする作業が十分に進んでいるとは言えない状況にあった。また、研究対象がベンサムおよび J・S・ミルという有名な思想家に極端に偏っており、功利主義理論の多様性に関心が向けられているとは言い難い状況であった。

研究代表者は、本研究開始以前に、J・S・ミルの社会科学思想を歴史的コンテキストのなかで読み解いた研究の成果を単著『社会体の生理学』として 2012 年に公表し、また、2012-14 年度若手研究（B）において、功利主義思想が道徳哲学のさまざまな領域において「組織化」されていった過程を検討することによって、功利主義思想の多様性と統一性を明らかにすることを目的とした研究をおこなってきた。本研究は、これらの研究の成果を継承・発展させ、功利主義の多様性を一層明らかにするためのものであった

2. 研究の目的

本研究の目的は、ベンサムとジェームズ・ミルのもとに集った 19 世紀前半のイギリスの功利主義思想家たち（哲学的急進派）の知的営為を、理論と実践の相克という観点から検討することである。この際には、19 世紀前半のイギリスにおける功利主義思想の展開を、個々の思想家の主要著作のみを通して描かれるような単線的な理論的発展としてではなく、さまざまな思想家によって担われた多様な諸理論からなる、包括的な知の複合体として理解することを目指す。

また、本研究では、ベンサムと J・S・ミル以外の功利主義思想家を取り上げて現在の関心の偏りを是正しつつ、未公開資料も分析対象にすることによって、功利主義社会思想の多様性を明らかにすることを目指した。具体的に検討対象とした功利主義思想家は、ジェームズ・ミル、デイヴィッド・リカード、ジョン・オースティン、ジョージ・グロート、ウィリアム・モルズワースなどである。これらの思想家はいずれも、19 世紀前半のイギリスにおける功利主義思想の展開を考える上できわめて重要であるにも関わらず十分な研究対象とはなっていない思想家である。

本研究に際しては、以下の 2 つの具体的な観点に関連づけつつ上述の思想家の知的営為を検討することで、功利主義思想の多様性を描きだすことを目指す。

理論と実践の相克

「理論と実践」への着目と言った時に意図しているのは、理論と政策（実践）の対応関係へ目を向けることだけではなく、理論が何らかの実践的帰結をもたらす上でコンテキスト（社会状況や人間関係など）が果たしていた役割に着目するとともに、その特定のコンテキストにおける固有の実践のあり方が当該の理論にどのような影響を与え変容をもたらすことになったかを分析することである。

哲学的急進派とも呼ばれた功利主義者グループは功利主義理論に基づいて社会改革を目指したグループであり、その思想や活動の分析のためには、理論と実践の相克の様相を歴史的コンテキストにおいて分析することが有効かつ不可欠であるが、これまでの研究では、一部の思想家を別にすれば、このような視角が十分であったとは言い難い。本研究では、上述した思想家たちを取り上げて、1. それぞれの思想において功利主義理論がとった多様な形態を理論的に検討するとともに、2. 彼らが自らの理論を、どのような形で、そしてどのような方法によって、具体的な施策として実現しようとしたか、3. その過程で功利主義思想がどのように発展し解釈の変容を蒙ったかという点について、知識のあり方を社会的文脈に関連づけて考察する「知の社会史」的な観点を援用しながら明らかにすることを目的とした。

ジェームズ・ミルを核とした人的ネットワーク

本研究では多様な功利主義思想家を取り上げるが、単に各思想家の個別研究をまとめあげるわけではなく、彼らの理論や実践をベンサムではなくジェームズ・ミルを中心とする人的ネットワークという枠組みの中で捉えることを目指した。このような観点から功利主義思想の多様性と統一性を描き出そうとする点が本研究の特長であった。

19 世紀前半の功利主義者は、現在ではベンサム主義者と呼ばれ、ベンサムの影響が強調されているが、当時はしばしばミル主義者とも呼ばれていたことが示唆するように、ジェームズ・ミルの指導的影響力が、ある面ではベンサム以上に大きかったことに留意する必要がある。

ベンサムやジェームズ・ミルのもとに集った功利主義思想家グループ（哲学的急進派）の研究としては、ベンサムを中心としてその政治経済思想の発展を理論的に検討した E・アレヴィ『哲学的急進主義の成立』や W・トマスの研究（『哲学的急進派』）が重要である。しかし、前者はベンサムの功利主義理論の発展に重点が置かれていたこともあって、その包括性にも関わらずグループ内部の多様性への関心が希薄であった。また、後者は個別研究のアソロジーの域を出ておらず、功利主義思想の理論的・体

系的検討を意図したものではなかったし、ベンサムの影響を小さく評価することによって間接的にジェイムズ・ミルの影響の重要性を示唆していたものの、この点について本格的な考察はおこなっていなかった。同時代の関係者によるさまざまな証言から明らかのように、ジェイムズ・ミルは、社交を断ち著作の執筆に専念していたベンサムに代わって、グループの指導者として重要な位置を占め、同世代および次世代の功利主義思想家たちに決定的な影響を与えていた。したがって、功利主義思想の展開・普及に大きな役割を果たしたジェイムズ・ミルの存在に着目し、彼のもとに集った思想家たちが担った多様な思想体系としての功利主義思想を検討することの意義は大きい。

さらに、ジェイムズ・ミルを核とした人的ネットワークへの着目は、急進派であった功利主義者の議論が、理論としての洗練度を高めつつ現実の政策に反映されていく過程で、どのようにして思想的影響力を広げていったかを理解するためにも不可欠である。この点に関して留意すべきは、急進派サークルの中で指導的地位にあったジェイムズ・ミルが支配層のウィッグ思想家・政治家とも強いつながりを持ち協力関係を築いていたという事実である。功利主義思想の理論と実践の様相を研究する際には、功利主義思想家を取り巻いていた人的関係がどのような理論的・実践的帰結をともなっていたかを、急進主義というレッテルにとられることなく検討することが必要である。この研究では、このような検知に基づいて、ジェイムズ・ミルを中心とした人的・思想的ネットワークに着目することによって、このような知的コンテキストの中で展開されていった功利主義社会理論の歴史的再構成を行うことを目的とした。

このような研究によって、功利主義の議論の内在的な理解に努めつつ、「理論と実践の相克」という観点から読み解くことで、功利主義理論の多様性についての理解を深めることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究において「思想」として検討の対象としたのは、単に著書や論文、書簡などの書かれたテキスト（言語的テキスト）だけでなく、実践的な活動（非言語的テキスト）もふくめた広い意味での人間の知的活動全般である。そして、このような思想を「歴史的」に再構成するというのは、思想をそれを担った思想家が実際に生きていた状況や背景（歴史的コンテキスト）において生み出され、それらによって特徴づけられる具体的・個別的な知的営為とみなし、その具体性・個別性を明らかにすることを目的とするということである。

具体的な作業としては、公刊され普及し

た諸著作だけでなく、ロンドン大学をはじめとするイギリスの諸機関に所蔵されている功利主義思想家の未公開草稿類や同時代の関係文書も調査・分析した上で、それらを歴史的コンテキストのなかで読み解くことをおこなった。本研究で調査・分析した主要なコレクションは、ロンドン大学およびブリティッシュ・ライブラリーにあるジェイムズ・ミル文書、ブリティッシュ・ライブラリー、ロンドン大学およびユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)にあるグロート文書、ブルーム文書、ベンサム文書などである。

4. 研究成果

以下に概要を記す研究成果について学会報告をおこなったうえで論文・著書の形でまとめた（なお、本報告書執筆時点でまだ公表されていないものがあり、それらについては準備が整い次第、速やかに公表する予定としている）。

ベンサムについて、その民主主義論とアメリカ合衆国に関する見解を、政治思想史研究において近年おおきな潮流となっている共和主義思想史研究に関連付けながら検討した。この成果については、論文「ベンサム、アメリカ、共和政」としてまとめた。この論文では、具体的には、二院制（上院の位置づけ）、悪政の防止手段、世論の役割などの論点についてのベンサムの議論を検討するとともに、その議論を、同時代人としてベンサム自身とも交流があったジェイムズ・マディソンらによる『フェデラリスト』における議論と比較することで、ベンサムの議論の共和主義的側面を指摘した。

また、ベンサムに関する重要な研究書(P. Schofield, *Utility and Democracy*)の翻訳をおこなった（次年度中に刊行予定）。

J・S・ミルについて、本研究による成果も取り入れ、これまでの研究をまとめた単著を公刊した(*Logic and Society*)。この単著では、ミルの1820年代末から1847年頃までの知的活動を、この時期に彫琢された彼の現代社会観とそれを科学的認識に高めようとした彼の試みに着目して検討した。特に、これまで十分に検討されてきたとは言いがたい彼の歴史論や性格形成の科学構想を検討することに多くの紙幅を割き、その特質を明らかにした。

また、ミル研究に関する2次文献の検討をすすめて、近年の研究動向を理解することに努め、その成果の一部を論文にまとめた（「新しい資料、新しい思想？ 近年のJ・S・ミル研究」、「J・S・ミル研究の現在」）。さらに、ミルの主著である『論理学体系』について翻訳をすすめた（次年度中に刊行予定）。

グロートについては、その思想をジェイムズ・ミルおよびベンサムの思想と比較す

るとともに、両者からどのような思想的影響を受けていたかを、これまでの研究史上の解釈を再検討しながら、一次資料に基づいて分析した。とりわけ、これまで十分に注目されてこなかった、ベンサム「世論法廷」や「公開性」といった概念とグルートの古代アテネ民主政論の関係について検討した。この成果については論文としてまとめてあり、次年度前半に学会誌に投稿予定である。

モルズワースについて、ホップズ著作集の編集・刊行という事業に象徴されるホップズへの哲学的関心と、改革派政治家としての実践活動との関係を分析するとともに、その知的営為の哲学的急進派における位置づけを検討した。また、19世紀イギリスにおける「ホップズ・リバイバル」にモルズワースをはじめとする哲学的急進派が果たした役割を明らかにするための研究をおこなった。この研究については、まだ論文を執筆途中であり、完成次第、学会誌へ投稿する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

川名 雄一郎、J・S・ミル研究の現在、ヴィクトリア朝文化研究、第13号、2015年、102 - 128頁

川名 雄一郎、新しい資料、新しい思想？
近年の J・S・ミル研究、経済学史研究、第56巻、2015年、67 - 93頁

〔学会発表〕(計5件)

川名 雄一郎、19世紀前半のイギリスにおける科学と社会、「近代イギリスにおける科学の制度化と公共圏」研究会、2018年3月7日、愛知県立大学

川名 雄一郎、19世紀初頭のエディンバラにおける骨相学、日本イギリス哲学会、2017年3月28日、南山大学

川名 雄一郎、19世紀前半のイギリスにおける決定論的性格形成論、経済学史研究会、2016年12月3日、関西学院大学

川名 雄一郎、19世紀におけるモラル・フィロソフィーの「組織化」、日本イギリス哲学会、2015年3月28日、甲南大学

川名 雄一郎、ドーバー海峡を渡ったトクヴィル 19世紀イギリスの定期雑誌における『アメリカのデモクラシー』論、日本イギリス哲学会関西支部会、2014年7月19日、関西学院大学

〔図書〕(計2件)

Kawana, Yuichiro, Palgrave Macmillan, *Logic and Society: The Political Thought of John Stuart Mill, 1827-1848*, 2017, 246pp.

川名 雄一郎他、京都大学学術出版会、徳・商業・文明社会、2015、285 - 305頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

川名雄一郎 (Kawana Yuichiro)

早稲田大学・高等研究所・准教授

研究者番号：20595920